

## 1. 高等学校基礎学力テスト（仮称）の基本的な考え方

### <目的>

- 生徒自らが高校段階における基礎的な学習の達成度を客観的に把握し、自らの学力を対外的に提示できるようにすることを通じて、生徒の学習意欲の喚起、学習の改善を図る

※高校教育の質の確保・向上のためのものであることに留意しながら制度設計や活用方策について検討

### <対象者>

- 生徒個人の希望に基づく参加を基本とし、学校単位での参加も可能とする。主な対象者をボリュームゾーンとなる平均的な学力層や学力面で課題のある層としつつ、できるだけ多くの参加を促すため、問題内容、実施時期・方法の工夫や、作問等での高校教員の参画を検討。

## 2. 現行学習指導要領下（平成31年度～）

### <対象教科・科目>

- 円滑に導入する観点から、国語、数学、英語で実施（選択受検も可）。

（範囲としては、全ての生徒が共通に履修する「国語総合」、「数学Ⅰ」、「コミュニケーション英語Ⅰ」を上限。）

※ 現行の学習指導要領においては、義務教育段階での学習内容の確実な定着を図ることとされていることを踏まえ、義務教育段階の内容も一部含める

### <問題の内容>

- ボリュームゾーンとなる平均的な学力層や、底上げが必要な学力面で課題のある層の意欲を高めることを念頭に置きながら出題。
- 知識・技能を中心としつつ、思考力・判断力・表現力等を問う問題も一部出題。

### <出題・解答・結果提供方式>

- 試行を通して、CBT-IRTを導入する方向で検討。 ※紙による試験実施も念頭に置きつつ検討。
- 正誤式や多肢選択式を中心としつつ、多様な解答方式の導入を目指す。
- 学習の目標を設けやすく、成果が実感しやすくなるよう、10段階以上の多段階で結果を提供。

（注）CBT:コンピュータ上で実施する試験。

IRT:各問題の難易度を考慮して得点を出す仕組み。複数回受験する場合に回ごとの試験問題の難易度の差による不公平を排除することが可能となる  
（例:TOEFL, 医学部共用試験等）

### <実施方法>

- CBT-IRTが円滑に導入された場合、実施時期・回数を制限せずに学校・生徒の都合に合わせて弾力的に運用することが可能。  
導入当初は、夏～秋を基本に高校2・3年で生徒の希望に応じ年間2回受検できる仕組みとし、随時見直し。
- 受検料は、1回あたり数千円程度の低廉な価格設定となるよう検討。低所得世帯への支援策も併せて検討。

# 「高等学校基礎学力テスト（仮称）」の主な論点整理（検討・たたき台）

## <活用の在り方>

- 上記1. に掲げる目的を前提としつつ、生徒の学習改善の観点から、高校での指導改善や国や都道府県等の教育施策の改善にも活用。
- 更に、学習意欲の低下が顕著な状態にある一定の推薦・AO入試の受検者層を特に念頭に置きつつ、進学時等において生徒が基礎学力を把握・提示するため、又は大学等が基礎学力を把握するための方法として用いることも想定。

※ 大学入学者選抜で活用する場合には、原則として2年次の結果は活用しない方向で検討。

※ 就職時の活用も考えられるが、企業等に対しテストの結果をもって生徒の可能性が狭められることのないよう一定の配慮を求める。

## <民間の知見の活用>

- 英語は、基礎的な学習到達度のきめ細かな評価、実施場所や費用負担、継続性・安定性に留意しつつ、4技能試験の実施に向けて、民間の資格・検定試験も積極的に活用する観点から、民間との連携の在り方について検討。

## 3. 次期学習指導要領下（平成35年度～）\*

- 高校生の基礎的な学習の達成度を把握する観点から、次期学習指導要領において示される必履修科目を基本として実施。

\*学習指導要領の改訂時期については、過去の改訂スケジュールから想定したものである。

高等学校においては年次進行で実施するため、平成34年度に入学した生徒が2年生になる平成35年度から次期学習指導要領対応となる。

■上記内容については、普通科や専門学科等の校長会、教育委員会、私学団体、PTA、大学関係者等と幅広く意見交換を行い、検討を進める